

3 2 0 サラリーマンの社会 (2)

サラリーマンという不思議な存在。

しかし、働く人達の80%を占めるのはサラリーマンだ。その理解なくして私達の生き方を位置付けることはできない。いや、私達の主要な顧客である中小企業経営者の人達の生き方を位置付けることもできない。

いま、新卒者の就職戦線が始まろうとしている。総合職、エリア総合職、一般職のいずれを選ぶかが、まず、最初の選択になるようだ。そして、これがサラリーマンという存在を定義しているように思う。

総合職と、エリア総合職、一般職。この三層構造は、多くの組織に存在する。裁判官と、書記官、裁判所事務官。財務省上級職と、国税調査官、その他の職員。幹部候補生と、自衛隊員、事務職員。このような三層構造で成り立つのがサラリーマン社会なのだろう。

① 本社採用で、全国転勤を続け、最後に社長になる可能性を持つ総合職の人達

② 支店で営業を担当し、最後に支店長になれば良いエリア総合職の人達

③ バックヤードを担当する一般職の人達

私達が意識するサラリーマンは①の人達だ。大手企業の名刺を持った人達が尋ねてくれば、その企業を意識してしまう。しかし、実際には、その人達は大手企業の看板を背負った②の人達でしかない。①の人達は、私達の目に触れないところで働いているのだ。

私達の身近に出没する②の人達は、NISAの勧誘をする証券会社の人達、中小企業への融資を担当する銀行員、税務調査を担当する税務職員

の人達だ。この人達は組織の兵隊であって、自らはモノを考える必要のない人達だ。

なぜ、教育資金信託を売るのか、なぜ、二世帯住宅や、賃貸併用住宅の建築を奨めるのか。不思議に思うことだが、しかし、モノを考える必要のない人達を相手に、そのような議論をしても意味はない。それらの経営（販売）方針は①の人達が決定しているのだ。

私達は、小さな事務所を経営しているが、常にモノを考える必要がある。自分でモノを考え、自分で生き方を決め、自分で仕事を選び、自分で自分の生活を築いていく。だから、誰もがモノを考えていると勘違いしてしまうが、しかし、違うのだ。

そして、サラリーマンの社会では、各々の階層に、また、競争があるのだと思う。①の人達は、東大卒から始まり、誰が先に役職に就くか。恐らく、35歳では結果が見えてしまう。それ以降は①の中の3層構造で生きていく以外にない。

裁判官であれば、卒業した大学、司法試験の成績、そして最初の任地と、次の任地で全てが見えてしまうはずだ。上位層に位置付けられた裁判官は、多様な人達との出会いと引きで、最後には裁判所官僚として定年を迎え、大企業に顧問の口を見付ける。

しかし、多くの裁判官は判決を書く兵隊として人生を終える。モノを考える必要はないし、仮に考えたとしても、自分の任地も、担当する仕事も、自分の稼ぎも、住まうところさえも自分では選べない。裁判所という看板を背負い、裁判官という権力を行使するが、それは兵隊としての権限であって、モノを考えた結果ではない。このような階層構造の理解なくしてサラリーマン社会は語れ

ない。

自分でモノを考えて、仕事を選び、稼ぎの内容を見極め、自分の住まいを決め、自分の生活を構築していく。そのような「当たり前」の世界に住む人達と、逆に、モノを考える必要がないという「当たり前」の世界に住む人達。お互いの「当たり前」の違いを理解してこそ、お互いの「当たり前」を位置付けることが可能になる。

1 4 6 6 字